資料1－4

進物太刀（景行天皇社所蔵）調査報告書

1　概要

長久手市西浦に鎮座する景行天皇社に伝わる進物太刀四口である。二口は、太刀が失われてしまっており、鞘のみしか残っていない。残っている太刀は「ツナギ」と呼ばれるもので、刀がない状態でも柄と鞘がバラバラにならないように維持しておくための部品である。「ツナギ」は折り返し鍛錬をせず、焼きも入れていないため、刃、刃文及び銘もなく脆い。そのため銃砲刀剣の登録も不要である。

2　各太刀（付属品含む）の寸法等

⑴　進物太刀(皺韋包風黒塗鞘糸巻太刀)　江戸時代　17世紀

※皺韋包：しわのようなでこぼこの韋で包んでいる包み方。

総長　106.5㎝　柄長　21.2㎝　鞘長　84.5㎝

ア　鐔（木製）

縦　9.4㎝　横　6.9㎝　耳厚　1.0㎝

木瓜形　、覆輪（真鍮製）、切羽は欠損。

イ　柄

布着、紫糸巻(但し糸欠損、現状麻苧にて仮巻き。)

ウ　鞘（木製）

皺韋風黒漆塗、渡巻　現状は露見している木地に微かに布の付着痕あり。

エ　金具等

兜金、猿手、足、責金、鐺、芝引、雨覆（真鍮製）、葵唐草文打出

オ　緒所

帯取（布痕あり）、太鼓金1　真鍮葵紋打出、真鍮無文革先金物1、太刀緒欠、

カ　「ツナギ」（鉄製）

刀身部長さ21.9㎝　茎部9.1㎝　孔無し

（佩裏に「四」と墨書あり。）

キ　その他　紙製紫柄糸の残欠あり(30 cm程度 2 本)
　蓋表に「徳川家康奉納木太刀」、蓋裏に「平成十年三月吉日　調製」と墨書のある桐箱に収まる。

⑵　進物太刀残欠(皺韋包風黒塗鞘)　江戸時代　17 世紀
鞘長　84.6 cm

ア　鞘(さや)（木製）
　皺韋包風黒塗(しぼかわつつみふうくろぬり)、渡巻(わたりまき)　萌黄地錦着(もえぎぢにしきぎ)　紫糸(紙製)残置

イ　金具等
　鞘口・足・責金(せめがね)・鐺(こじり)・芝引(しばひき)・雨覆(あまおおい)　真鍮葵唐草文打出(しんちゅうあおいからくさもんうちだし)

ウ　緒所
　帯取（欠損）、太鼓金(一の足に一つ)　真鍮葵紋打出、

エ　その他
　蓋表に「徳川家康奉納木太刀」、蓋裏に「平成十年三月吉日調製」と墨書ある桐箱に収まる。

⑶　進物太刀(皺韋包風黒漆鞘糸巻太刀(しぼかわつつみふうくろうるしさやいとまきたち))　江戸時代　17 世紀
総長　107.5 cm　柄長　21.0 cm　鞘長　85.0 cm

ア　鐔(つば)
　縦　9.6 cm　横　7.0 cm　耳厚 1.1 cm

イ　柄(つか)
　布着、紫糸巻残存

ウ　鞘(さや)（木製）
　皺韋包風黒漆塗(しぼかわつつみふうくろうるしぬり)、渡巻(わたりまき)　布着紫糸巻残存

エ　鐔(つば)（木製）
　木瓜形(もっこうがた)　覆輪(ふくりん)（真鍮(しんちゅう)製）、切羽なし

オ　金具等
　兜金・縁・鞘口・足・責金・鐺・芝引・雨覆　真鍮葵唐草文打出

カ　緒所
　帯取は欠損、太鼓金(二の足に一つ)　真鍮葵紋打出

キ　ツナギ（鉄製）
　刀身部長 22.2 cm(柄から抜かず茎長の計測と孔確認できず。)
　（佩裏に「二」と墨書あり。）

ク　その他
　蓋表に「徳川家康奉納木太刀」、蓋裏に「平成十年三月吉日　調製」と墨書ある桐箱に収まる。

⑷　進物太刀残欠(皺韋包風黒塗鞘他)　江戸時代　17 世紀
　鞘長　84.5 ㎝

ア　鐔
　縦　9.4 ㎝　横　6.9 ㎝

イ　鞘（木製）
　皺韋包風黒漆塗、渡巻欠損　布着痕あり

ウ　鐔（木製）
　木瓜形、覆輪（真鍮製）、切羽なし

エ　金具等
　鞘口・足・責金・鐺・芝引・雨覆　真鍮葵唐草文打出

オ　緒所
　帯取（欠損）、但し箱内に一の足の帯取、太鼓金欠損

カ　その他
　蓋表に「徳川家康奉納木太刀」、蓋裏に「平成十年三月吉日　調製」と墨書のある桐箱に収まる。同箱内には真鍮葵紋打出の太鼓金二つと葵紋三双目貫(一組と片目貫）、真鍮無文の革先金物二つが残存。
　また、「大足彦忍代別天皇（＝景行天皇）　安政五年　戊午十一月廿六日」と細筆で墨書された縦 111.5 ㎝、横 82.0 ㎝、上部にチチが四か所あり。麻地に金糸の帳状の物が畳まれて収められている。

3　所見

　進物太刀とは、上がり太刀・遣い太刀・造り太刀・進上太刀・献上太刀などともいい、献上する太刀の代わりとして鳥目(お金)と共に奉納された模造の太刀拵である。
　天保三(1832)年に祠人（神社を管理する在地の人。）青山助太夫が尾張藩の寺社奉行へ書き上げた景行天皇社の「由緒書」(長久手市所蔵の細野要齋『長湫記附録』に「写」が所収)によれば、同社への太刀献納記述が三例見られる。
　①天正十二(1584)年九月に織田信雄、十月に徳川家康
　②慶長九(1604)年正月に松平忠吉（家康の四男。初代清洲藩主。）
　③元和八(1622)年に徳川義直（家康の九男。初代尾張藩主。）
　このうち、①の信雄・家康の太刀は万治年中(1658～61)に盗難にあったこ

と、②は追って御内意により差上げ(返戻)たとの記述がみられる事から現在伝わっている四口(ふり)には当たらず、③には「右御備之御太刀(みぎおんそなえのおんたち)、追而藤田民部殿(おってふじたみんぶどのを)を以御内意(もってごないい)ニ而被召上(てめしあげられ)、惣御紋付御金物作御太刀御納相成(そうごもんつきおんかなものづくりのおんたちおんおさめあいなり)(下略)」との記述がある。また、追って遣わされた藤田民部(ふじたみんぶ)とは、家康、忠吉、義直に使えた藤田民部少輔安重(ふじたみんぶのしょうやすしげ)（永禄元（1558）年～寛永十二（1635）年。父の代から徳川氏に仕え、小牧・長久手の戦いや大坂の陣で戦功を挙げたと伝わっている。松平忠吉に仕えて国奉行を務め、次いで義直に仕えた。）とも考えられ、時代的には齟齬がない。そのため、伝わっている四口(ふり)は、③の元和八（1622）年に徳川義直が太刀を奉納した後に、その代替として納められた進物太刀「惣御紋付御金物作御太刀」の可能性が高い。その数が四口(ふり)となったのは、信雄、家康、忠吉の三口(ふり)を含めての処置であったためであろうか。「ツナギ」の「二」と「四」墨書は、当初は四口(ふり)すべて揃っている時点で、区別するために書かれたものと推測される。（但し、盗難の真偽や要齋が神社を訪ねた当時の伝承への考証等が必要である。）

　そもそも、進物太刀は、その用途から概ね仕様は極めて粗略で現在まで残っているものが少ない。完全な状態のものは、幕末頃製作と鑑定されている物がわずかに知られる（東京国立博物館所蔵）程度にすぎない。その点、本点は残欠を含むが、「惣御紋付御金物(そうごもんつきおんかなもの)」の同仕様で四口(ふり)が揃っている点と由緒書によりその制作年代が江戸時代初期にまで遡る可能性が高く、「ツナギ」という刀身の代わりとなるものが、幕末頃制作の物に見られる木製でなく鉄製であることも管見では類品がなく、また前掲の『長湫記附録』には当時の写生図(要齋の息子の一徳筆)も存しており、進物太刀の研究上極めて貴重である。

愛知県銃砲刀剣登録審査委員　福井款彦　記

（令和５年 11 月 16 日調査）

参考
進物太刀（東京国立博物館所蔵）２口
江戸時代 19 世紀
黒漆糸巻太刀（くろうるしいとまきたち）　総長 95.3 cm　黒皺韋包糸巻太刀（くろしぼかわつつみいとまきたち）総長 103.4 cm